

論文要旨

文化庁では、国語施策の参考とするため、全国 16 歳以上の男女を調査対象として、平成 7 年度から毎年「国語に関する世論調査」を実施している。平成 19 年度の調査において「日本語が乱れていると思うか」という質問に対して、対象者の約 8 割が乱れていると思っていることが明らかになった。

メディアの言語は公共的であるべきであるが、メディアそのもののことばを乱だしている、という見方がある。現代日本語の在り方を探るために、ここでは、公共性を有し、社会的に影響力が大きい新聞のことばを検証してみよう。

マス・メディアには監視機能、相互関連化機能、そして伝達機能という三つの主要な社会的機能がある。マス・メディアは全体として社会統合のための組織であり、人々の価値判断に影響を与えることができる。政治的指導者の行動の基準に影響を及ぼすこともある。マス・メディアが社会を動かしているとも言える。人々の「現実」の理解に影響し、人々を緊密に結びつける共通の価値を強調するからだ。マス・メディアの中で特に、新聞は社会の動きや言語の変化に重要な役割を果たしている。新聞は社会の民主化という課題を促進させる。

本論文では、新聞における言語表現と読者の意識との関係についても注目したい。人々は読書行為を通して、自ら読んで理解し、記憶に残す部分を共通傾向や信念に沿って選択している。

新聞の報じる内容は大衆の在り方を語るのと同時に、新聞の存在価値そのものを示している。新聞の伝えるメッセージには現代における言語の多様な姿が現れている。だからこそ、新聞の言語は公共的な日本語の研究資料となり、ひいては「現代の言語」の在り方を研究することを可能にする。新聞の言語とは、現代社会が持つテキストというべきものであろう。新聞に載せられた「内容・記事」を分析・検討すれば、その新聞の特徴や、情報をやり取りする「現代の言語」のありようが客観的に見えてくるであろう。

現代社会における日本語の在り方はメディアに大きな影響を受けていることは言うまでもない。そもそも、近現代における共通語の普及の過程においてもラジオやテレビなどのメディアが大きな影響を与えたことが指摘されている。また、情報を伝達する手段として言語の表現形式はメディアごとにより異なっている。例えば、新聞や雑誌などのような活字・印刷物は書き言葉を用いる。それに対して、ラジオやテレビのような放送メディアは音声・映像と共に話し言葉を用いる。どちらにおいても、ことばの正しさが要求されている。さらに、正しさのみならず、すべての読者、視聴者は理解しやすい言葉を求めている。

第1章では、日本語におけるマス・メディアの影響について考察した。

第1節ではマス・メディアの社会的な役割と特徴を述べ、第2節と第3節ではマス・メディアの公共性を探りながら、新聞の社会的な影響力と公共性について述べた。第4節～6節ではマス・メディアがもたらす日本語への影響について、新聞とテレビを中心に具体的な実例を取り上げ、日本語の乱れの傾向を考察した。第7節では本論文における新聞を言語資料とした理由について述べた。

第2章では、新聞における敬語表現に焦点を当てて、「敬意」と「敬称」の関連性と相違点を探り、調査、分析した。

新聞における敬語表現は敬意の対象となる人間をどれ位高く評価するか、又その人格をどの程度認めるかという、その時代の社会の感情や価値観を反映するものと言える。これらの表現は話し手と聞き手の人間関係・その時の状況・場面などコミュニケーション行動における様々な要素に関わっている。

皇室敬語に関しては、特に時代が移り変わった昭和末期から平成初期にかけての日本の新聞における昭和天皇と今上天皇に対する報道姿勢と視点にどのような特徴があるか、敬語の変遷がどのように反映されたか、実例を分析し究明する必要がある。

具体的には昭和天皇の崩御(1989年1月7日)と今上天皇によるパラオへの慰霊の旅(2015年4月8日・9日・10日)についての「読売新聞」、「毎日新聞」、「朝日新聞」、それぞれの報道記事内容を活用し、天皇に対する敬語表現を比較対照した。昭和から平成へと時が推移すると共に三紙における皇室敬語にも変化が現れている。

第3章では、外来語の言い換え語について調査・検証・考察した。

国立国語研究所では、国民の言語生活に大きな影響を与えるマス・メディアや教科書での言葉の使われ方の調査、いわゆる「語彙調査」を行っていた。

昭和41(1966)年から、新聞(昭和41年発行の朝日・毎日・読売各紙)を対象にした語彙調査が行われた。「朝日新聞」、「毎日新聞」、「読売新聞」のこの年の朝夕刊一年分を対象とした調査である。この結果として異なり語数で見ると、本来語である和語が38.8%、漢語系外来語が44.3%、その他の外来語が12.0%、混種語4.8%となっていて、外来語が日本語全体の60%以上を占めていることがわかった。新聞はだれが、どこで、いつという、毎日の社会的なできごとを速報する役目をもっている。

国立国語研究所が2005年に公表した「外来語に関する意識調査」では、「ハザードマップ」について、回答者の91.1%が「災害予測地図」などに言い換えて良いと答えた。理由は「わかりやすいから」が7割以上を占めたということだ。日本語母語話者は外来語の過剰使用否定的に捉えられる傾向を持つ。日本語教育の現場においても、特に海外日本語学習者にとって外来語使用は大変な難関であり、「苦手な」ことばとして扱われている。

第2節では「朝日新聞」における外来語の言い換え語の使用頻度を調査した。

「朝日新聞」1991年から2015年までに発行され「朝日新聞」東京（朝刊・夕刊版）を中心に調査を行う。5年間を区切りとして176の言い換え語を調べた結果、上位40語の中で、さらに、抽出した使用頻度の高い上位10語の外来語を調査分析する。

第3節では「読売新聞」における外来語の言い換えについての使用調査を行なった。具体的には「朝日新聞」から抽出した外来語の言い換え40語について、「読売新聞」1991年から2015年の25年間で、5年間ごとにそれぞれの外来語の使用頻度を調査した。

第4節は「毎日新聞」における外来語の言い換えについての使用調査を行なった。同様に、「朝日新聞」から抽出した外来語の言い換え40語について、「毎日新聞」1991年から2015年の25年間で、5年間ごとにそれぞれの外来語の使用頻度を調査した。

第5節では三大紙における外来語の使用調査を比較したものである。第6節では「外来語」の言い換え語提案に関するアンケート調査を行い、現代社会において大学生を対象に関心度、理解度、使用意識などを探ることを目的とする。第7節はアンケート調査の結果を総合的に分析したものである。

第8節は分析のまとめとして、特に「朝日新聞」「読売新聞」「毎日新聞」から抽出した頻度の高い外来語10語の中では「ビジョン（展望）」、「コミュニティー（地域社会 共同体）」、「アクセス（①接続 ②交通手段 ③参入）」について、外来語言い換え提案に基づいて妥当性が高く示されていること、また、「インフラ（社会基盤）」、「ガイドライン（指針）」、「グローバル（地球規模）」、「ケア（手当て 介護）」においては使用頻度が高く表れていることを示し、大学生の中では定着度も高いと推測される点を述べた。

第4章では新聞で用いられている略語を中心に、現代日本語の多様な姿を捉える調査研究を行ったものである。新聞記事によって、日常生活で目に触れる文章には、略語が高い比率を占めている。略語が日本語の公式の場面、書き言葉などでは、一般的には原形が優先されているにも関わらず、略語は現代の日常生活で使用されている。現代日本語には、定着して正式名称として使用されるようになった略語と、略語として意識されなくなった単語（略語）が次々に出現する。

省略語が新聞紙上にも頻繁に使われている傾向が見られる。例えば、就職活動が「就活」、結婚活動が「婚活」、保育活動が「保活」といった具合である。このような「〇活」省略語はなぜ生じたのか、社会の変化につれて、ことばにどんな変化をもたらされるのか。

新聞においても省略語が多いことは着目に値する。省略語は便利な半面、軽さ、分かりづらさをも同時に備えている。さらに、新しい省略語が次から次へと出現するため、読者にとっては意味を理解し難い状況が頻繁に起きる。その原因を明らかにすることは、略語の研究にとって重要な課題になると思われる。そのためには、社会の背景を踏まえて考えることが必要である。

調査に当たっては、朝日新聞社が提供している朝日新聞記事データベース「聞蔵Ⅱビジュアル

ル」、読売新聞社が提供している「ヨミダス歴史館」、毎日新聞社が提供している「毎日新聞記事」検索を活用して、近年の記事の中で社会的に大きな影響を与えた、典型的な省略語を対象にする。

第5章では、第2章から第4章までの研究の結果を踏まえ、社会的背景を分析し、結論をまとめている。

新聞の言語は概ね公共的であることは明らかになった。新聞の言語の社会に対する影響は以下のように考えられている。新聞は情報伝達やメッセージ—宣伝などにおいてタイムリーで、かつ素早い。さらに、社会的に広範で、かつ深いと同時に、言語の動向や成行きを導いていることにおいて重要な位置を占めている。

しかし、部分的にも問題があったことが明らかになった。特に第2章では、敬語の使用について新聞社ごとに対応の差があり、各新聞の表現は異なっていることが明らかになった。

第3章では外来語言い換え語調査によって、外来語多用の傾向があることが明らかになった。特に、若い世代による外来語の多用であり、使用意識、意味の理解度に高い特徴が表われている。外来語が増加しつつあることから、氾濫する恐れがある。

また、第4章では省略語多用の傾向によって、若者たちの仲間意識、省エネルギー、インパクトがつよいイメージを持ち、過剰な造語や省略語が多く使われていることから、言葉の意味がわかりにくくなる点について述べた。このように公共的言語使用に反する一面もある。

新聞は受け手側（読者）の年齢層が極めて多種多様である。新聞には受け手側（読者）の大多数にとって分かり易いと思われる言葉、情報を正しく伝える使命があると同時に、大多数の人に正しいと考えられている日本語を用いることが判断基準となる。率先して標準的なよい日本語の範を示してほしい。常に大多数の受け手側（読者）の意識に一致するように配慮し、受け手側（読者）の声を受け止めて、謙虚な姿勢をとることが重要である。